

専門分野(がん)における
質の高い看護師育成事業

報告書

平成23年3月
山口県健康福祉部

ごあいさつ

がんは、本県において、死亡原因の第一位であり、年間４千人以上の県民ががんにより亡くられるなど、がん対策は、県民の生命及び健康を守る上で非常に重大な課題であります。

このため、本県では、「がん対策の充実」を「住み良さ日本一元気県づくり加速化プラン」の中の重点事業の一つに位置づけ、平成２０年１１月には、長門・萩保健医療圏に「がん診療連携推進病院」を新たに指定し、県内全医療圏すべてに、がん診療の中心的な役割を果たす病院の配置が実現したところです。今後は、その機能強化や病院間の連携、さらには、医療従事者の資質向上等により、本県のがん医療水準の向上を図っていくこととしております。

こうした中、「専門的な臨床実践能力を有する看護職員の育成を図り、山口県全体のがん看護のレベル向上を目指すこと」を目的に、がん看護に従事する県内の病院看護師を対象に「山口県専門分野（がん）における質の高い看護師育成事業」を平成２０年度から取り組んでまいりました。昨年度は、８名の看護師の方々が受講され、大変好評を得たところであり、今年度も引き続き、県が設置・運営する「事業検討会」を経て、県がん診療連携拠点病院である山口大学医学部附属病院に委託し、実務研修を実施いたしました。

実務研修には、県内各病院から８名の方に参加いただき、臨床での質の高い研修を受講され、全員が研修を終了されました。

実務研修を終了された皆様におかれては、研修成果を医療現場に持ち帰っていただき、それぞれの職場におけるがん看護の質の向上のため、今後ともご尽力いただくことを心から期待しております。

終わりに、実務研修を快く引き受けてくださり、質の高い実務研修に多大なお力添えをいただいた山口大学医学部附属病院の皆様方、実習を引き受けていただいた施設の皆様方、また本事業の検討を重ねていただきました検討委員の皆様方に深く感謝申し上げます。

平成２３年３月

山口県健康福祉部長
今 村 孝 子

ごあいさつ

第3回の専門分野(がん)における質の高い看護師育成事業の修了にあたり、御協力いただきました皆様にお礼を述べるとともに、御挨拶を申し上げます。

この事業(研修)は、都道府県がん診療拠点病院の指定を受けている本院が、山口県からの委託を受け、企画・運営をお引き受けして3年が経過しました。この研修は、がんにおける専門的な臨床実践能力を有する看護職員を育成し、山口県内のがん診療機能を有する医療機関の看護レベルを向上させること、すなわち「がん看護実践の均てん化」を目的に実施して参りました。

3年間の本研修を受講していただいた総受講者は、26人でした。受講者数は多いとは言えませんが、研修の内容につきましては、受講者の皆様方より高い評価をいただいています。例えば、各年度の研修終了後には、フォローアップ研修として、次年度の研修時におけるグループワークや事例発表会のファシリテーターとしてご参加いただきました。その際に役割をきちんと果たされる自信に満ちた姿に成長が実感できて感激しました。また、研修終了後、6ヶ月及び1年後には、各施設代表者と受講者へ「フォローアップ評価」と「事業企画評価」をお願いし、次回研修に活かして参りました。

研修修了者からは、次のステップである日本看護協会のがん関連分野の認定看護師課程の受講やその準備をされているというお話を聞き、大変嬉しく思いました。今後もさらに自信を持ってチャレンジしていただきたいと思っています。

医療の現場では、これからも増え続けるがんに対して、予防、早期発見、最新の治療、緩和医療、安楽な死への関わりを懸命に続けていく事になります。そのためには、患者さん、ご家族の意思を尊重した上で、医療者がチームを組んで取り組む必要があります。県内の各施設でのがん看護実践において、この3年間の研修が役に立つと信じています。

3年間のこの事業を終了するにあたり、講師をお引き受けいただいた先生方、実習をさせて頂いた各施設の皆様そして、検討委員の皆様方に深く感謝いたします。

平成23年3月

山口大学医学部附属病院
看護部長 花田千鶴美

目 次

《事業概要》

1. 事業目的	1
2. 事業概況	1
1) 山口県専門分野（がん）における質の高い看護師育成事業検討会の設置	
2) 実務研修の実施	
3) 受講者の概要	
3. 実務研修の実施状況	3
1) カリキュラムについて	
2) 研修実施報告	
3) 演習	
4) 実習	
5) 中間評価・事例検討	
6) 最終報告会	
7) 修了式	
4. 評価	10
＜個人評価＞	
1) 評価方法	
2) 具体的な手順	
3) 評価結果	
＜事業企画評価＞	
1) 評価方法	
2) 具体的な手順	
3) 評価結果	
＜フォローアップ調査（業務への反映度の測定）＞	
1) 評価方法	
2) 具体的な手順	
5. 受講生の報告	18
1) ケースレポート報告	
2) プロセスレコード報告	
3) 最終カンファレンスについて	
6. 平成 21 年度フォローアップ調査結果およびフォローアップ研修	126
1) 平成 21 年度事業実施概要	
2) フォローアップ調査実施方法	
3) 調査結果	
4) フォローアップ研修結果	

《参考資料》

1) 事業実施要綱	130
2) 研修カリキュラム	134
3) 事業評価の実施要項、様式	141

《事 業 概 要》

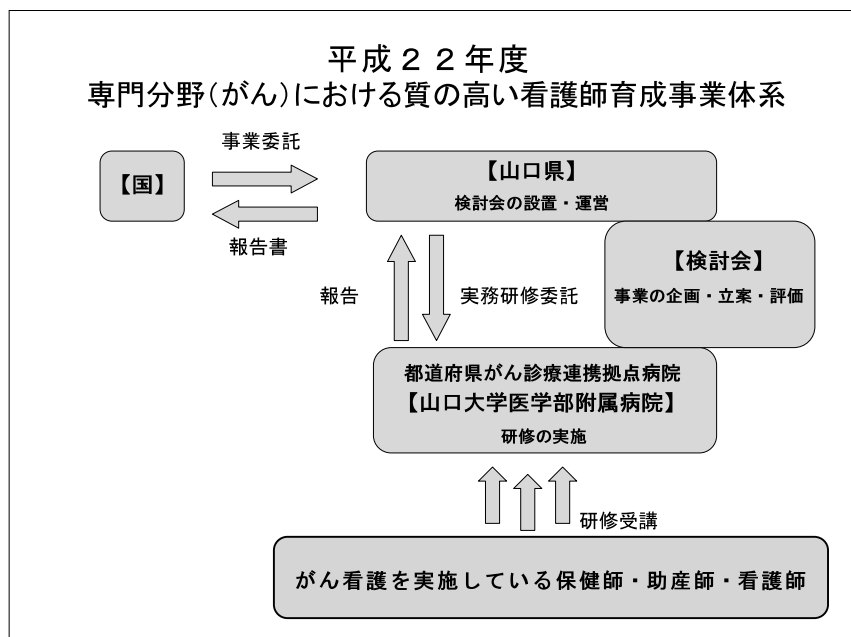
≪事業概要≫

1. 事業目的

がんにおける専門的な臨床実践能力を有する看護職員を育成し、山口県内のがん診療機能を有する医療機関の看護のレベルを向上させることを目的とする。

2. 事業概況

事業は、①「専門分野（がん）における質の高い看護師育成事業検討会」（山口県医務保険課）、②「実務研修」（山口大学医学部附属病院への委託）の2部構成となる。



1) 山口県専門分野（がん）における質の高い看護師育成事業検討会の設置

この事業の実務研修の企画・立案・評価等に関して、山口県が検討会を設置して行った。

検討会開催状況

開催日	開催状況
H22. 8. 2	第1回がん看護師育成事業検討会（事業説明、実務研修の説明） （内容） 事業説明 ・国、県の施策の方向性について ・事業の流れについて

	実務研修の確認 ・研修目標について ・受講者の募集について (受講資格、募集人員、募集日程、選考方法 等) ・カリキュラムについて(内容、講師陣、他実習施設 等) ・評価方法と評価内容について
H23. 2. 15	第2回検討会(実施報告、評価について) (内容) 事業実施報告について 実務研修実施報告および評価について

2) 実務研修の実施

厚生労働省の実施要綱(研修基準)に基づき、都道府県がん診療連携拠点病院に指定されている「山口大学医学部附属病院」に委託した。

研修期間：講義：9月27日(月)～10月6日(水)(8日間)
実習：10月18日(月)～11月26日(金)(28日間)
開催場所：山口大学医学部附属病院
受講定員：20名程度
受講資格：①看護師として実務経験が5年間以上あり、がんに関連する看護に携わった経験のある保健師、助産師、看護師
②所属長(所属部局長)の推薦が得られる者
③原則として研修期間全日程に出席できる者
④研修終了後にがん看護ケアが実践できる者
研修内容：参考資料参照

3) 受講者の概要

受講者数：8名
参加病院：光市立光総合病院1名、萩都志見病院1名、美祢市立病院1名、総合病院社会保険徳山中央病院1名、済生会山口総合病院1名、山口大学医学部附属病院2名、周南市立新南陽市民病院1名
平均年齢：38.6才
平均経験年数：16.1年

3. 実務研修の実施状況

1) カリキュラムについて

平成 22 年度のカリキュラムは、平成 20・21 年度に実施した「専門分野における質の高い看護師育成事業（がん看護研修）」プログラムに準じた。内容は、がん看護全域を網羅した 7 項目から構成され、本研修の大目標である“臨床実務能力の高い専門的な看護師の育成”を目指した科目設定となっている。

講義は、がん看護専門看護師 2 名、がん化学療法看護認定看護師 3 名、がん性疼痛看護認定看護師 2 名、緩和ケア認定看護師 1 名、乳がん看護認定看護師 1 名、皮膚・排泄ケア認定看護師 1 名、摂食・嚥下障害看護認定看護師 1 名、訪問看護認定看護師 1 名、その他院内認定看護師（がん看護）が主に担当した。

初日から 8 日間は院内講師 25 名、院外講師 9 名が講義・演習を行った。その後、緩和ケア病棟 5 日間、訪問看護ステーション 2 日間、外来点滴室 3 日間、がん病棟実習 14 日間の計 24 日間の実習を実施した。

2) 研修実施報告

(1) 開講式

各関係者が出席し開講式を行い、その後受講生の自己紹介と実習要綱に沿ったオリエンテーションを行った。



(2) 講義

初日の開講式とオリエンテーションの後、8 日間の講義・演習を実施した。

講師は専門看護師や認定看護師を中心に、院内の看護師、医師、薬剤師、MSW の 25 名と院外講師 9 名で実施した。

内容は以下の通りであるが、特にがんの治療の実際と看護、治療に伴う症状看護の実際と心理的な援助に重点をおいた内容とした。



【講義内容】

総論：がん看護総論、危機理論、がん性疼痛看護総論・各論、がん患者の心理過程
がん医療における薬剤師の役割、チーム医療、家族ケア、緩和ケア
在宅緩和ケア、倫理的問題への対応・意思決定支援、地域との連携活動
症状緩和：セルフケア支援、消化器症状への看護、嚥下障害の看護、
リンパ浮腫ケア、皮膚創傷ケア、呼吸理学療法、口腔ケア
がん治療：大腸がんの治療、肝がんの治療、乳がんの治療、乳がん化学療法看護
婦人科がんの治療、血液がんの治療、血液がん患者の看護、肺がんの治療
放射線療法、放射線療法看護、がん性疼痛の治療、化学療法看護

3) 演習

がん看護に必要な技術習得を目的に、口腔ケア、嚥下障害の看護、呼吸理学療法、リンパ浮腫ケアの演習を講義と合わせて実施した。

呼吸理学療法では、シミュレーターを用いて呼吸音聴取を実施した。また、リンパ浮腫外来の見学も実施した。



4) 実習

8日間の講義による座学終了後、24日間の実習を実施した。

【実習内容】

- | | |
|--------------------|--|
| ①病棟実習（14日間） | 山口大学医学部附属病院 |
| ②外来点滴室実習（3日間） | 山口大学医学部附属病院外来点滴室 |
| ③緩和ケア病棟実習（5日間） | 山口赤十字病院・安岡病院・徳山中央病院・
山口宇部医療センター |
| ④訪問看護ステーション実習（2日間） | 虹の訪問看護ステーション
原田訪問看護センター・山口赤十字訪問看護ステーション |

①病棟実習

1か所の実習場所において、がん患者1名ないし2名を受け持ち、合計14日間の病棟実習を行った。各病棟にはその日毎に指導者を特定し、研修生が連絡・報告・相談をしやすい体制をとった。

実習では、受け持ち対象者を1人の人間として捉え、全人的に理解することを重要課題とし、日々の看護実践やコミュニケーション方法などを振り返り、よりよい看護を提供するために自分にできることを再考するよう関わった。

病棟カンファレンスへの参加や患者家族との関わりの中で、複雑な心理状況を理解すると同時に看護専門職としてあるべき姿などを再認識できた。

②外来点滴室実習

外来化学療法に求められる「安全・安楽・確実」な抗がん剤の投与、外来化学療法を受ける患者のセルフケア支援の実際、がん化学療法を受ける患者の「語り」の意味を学ぶことを目的に3日間の実習を行った。

がん化学療法を受ける患者の治療目的、疾患や病態、生活背景など個々に応じたアセスメントを的確に行いながらアプローチすることの大切さ、意思決定支援についても学ぶことができた。また、1・2名の患者との対話を通し、「語り」の中にあるがん患者の複雑な思いなどを学ぶことができた。

抗がん剤の管理や調剤については、薬剤師による安全キャビネット内での調剤見学、チェックシステムの見学等を行った。

③緩和ケア病棟実習

研修生は各々の緩和ケア病棟実習での研修目的を挙げ、5日間の実習を行った。研修目的が達成できるよう担当者とコンタクトを取りながらケアの見学などを行い、緩和ケア病棟の役割と特徴を理解することができた。

聴くことの大切さ、デスカンファレンス、倫理カンファレンス、グリーフケアの実際について学び、「その人らしさ」を常に考えること、患者主体の看護について学ぶことができた。緩和ケア病棟というハード面の違いはあるが、「看護ケア」の本質は同じで、「何をしたかではなく、どれだけ心を込めたかが重要」であることも改めて認識できた。

④訪問看護ステーション実習

2日間の実習で、訪問看護師と共に訪問看護の実際を体験し、在宅における継続看護の役割とその特徴を理解することができた。家族の様々な思いを受け止め、家族と一緒に考え支えるという視点で関わっていくこと、知識だけでなく知恵も大切であることなどを学んだ。また、入院中に患者や家族の意向を聞いておくことの重要

性を再認識し、継続看護として捉えることを学んだ。

5) 中間評価・事例検討

実習開始 14 日目に中間評価・事例検討を実施した（次頁表 1 参照）。

ここでは、研修生が現時点までの実習場所で体験した事例、学んだ事、悩んでいることや戸惑ったこと、今後の課題などを発表し合い、情報共有しながら意見交換を行い、意欲的に残りの実習を継続できることを目的とした。

研修生の研修場所は様々であったが各実習場所での学び、受け持ち患者に関する事例紹介や看護の状況などを 1 人 10 分程度で発表した。発表後 10 分間の質疑応答の時間を設けた。発表の形式は問わず、パワーポイント形式、ポスター形式で行った。

訪問看護ステーションや緩和ケア病棟へは、初めて入った研修生がほとんどであったが、カンファレンスへの参加や、ケアの実際を見ることで新たな知見を得ることができ、そのことを報告できた。

戸惑ったことでは、担当患者との信頼関係の確立、情報収集の方法、実習病棟看護師との関係に戸惑いストレスを感じているという報告があった。

また、昨年度の研修生 5 名に、研修中の体験談、現在の活動状況の報告などを 5 分程度で発表してもらい、研修生との意見交換を行った。研修生は、現在の実習に関する悩みなどはほとんど解決している状態であったため質問等はあまり出なかったが、活動状況を聴くことで、研修後の自己の活動などをイメージすることができた。

その後のカンファレンスでは、緩和ケア病棟実習、訪問看護ステーションでの感想や、病棟実習で患者との関係や看護師スタッフとの関係などで戸惑っていることなどの意見が出た。また、課題に対しては研修生自身で解決策を見出しており、後半の病棟実習へ向けての意欲を持つことができた。

